

令和 6 年 6 月 30 日現在

機関番号：44514

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00358

研究課題名(和文) 平安初期歌合における和歌表現の研究 - 宇多院をめぐって -

研究課題名(英文) A study of Waka expression in Early Heian period Uta-awase by Retired Emperor Uda

研究代表者

竹下 麻子(三木麻子)(TKESHITA(MIKI), ASAKO)

神戸教育短期大学・こども学科・教授

研究者番号：60544947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：(1)「是貞親王家歌合」(2)「延喜元年八月十五夜歌合」(3)「寛平中宮歌合」(4)「寛平御時后宮歌合」の注釈を進めた。(2)は小規模歌合として取り上げ、その新出資料も加え、「番」の構成意図や歌合開催意図を明らかにしていくことの重要性を確認した。

(1)(3)(4)が『新撰万葉集』編集のために企画されたという萩谷朴説を承けて、(2)で必要性を確認したように、番われた二首の構成意図を検証することが歌合の完成度を測ることに繋がると考え、(1)(3)(4)について検討した。ところが、(4)が大部の上、本文の欠損部分もあって、(4)の検証途中で期間終了となった。(4)の源態考証と、研究を継続する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歌合研究は、萩谷朴『平安朝歌合大成』に詳細な研究があり、個々の歌合についての研究はなされているが、歌合を史的な観点から系統立てる研究は、平安初期に限ればその数は少ない。『古今和歌集』成立以前の和歌の表現方法が確立する以前に、歌合という披講の場がどのような役割を果たしたのか。『新撰万葉集』成立に関わる3歌合に焦点を当てて、歌合として和歌が構成される意図を解明しようとした。

これは大局的には、歌合史の中で、平安初期に歌合が果たす「撰歌機関(萩谷朴氏の言)」としての機能を実証することになり、『大成』の研究を再検討することとなった。

研究成果の概要(英文)： We annotated: (1) "Koresada-Shinno-ke Uta-awase," (2) "Uta-awase on the night of August 15, the first year of the Engi era," (3) "Kanpyo Chugu Uta-awase," and (4) "Kanpyo Ontoki Kisainomiya Uta-awase". We took up (2) as a small-scale Uta-awase, and confirmed the importance of clarifying the intention of organizing the "Tsugai(pair)" and the intention of holding the Uta-awase

Accepting the opinion of Boku Hagitani that (1), (3), and (4) were planned for the compilation of the "Shin-sen Manyoshu," as we confirmed in (2), we examined (1), (3), and (4), believing that the completeness of the Uta-awase can be measured by verifying the compositional intention of the Tsugai (pair) poems. However, due to the large size of (4) and the missing parts of it, the study period ended in the middle of examining (4). We will continue our research while examining the original form of (4).

研究分野：古代文学・中世文学

キーワード：平安初期歌合 宇多院 是貞親王家歌合 寛平御時中宮歌合 寛平御時后宮歌合 新撰万葉集

1. 研究開始当初の背景

『古今和歌集』成立以前の記録が残る平安初期歌合について、詳細な解説が行われているものは少なく、それは完全な形で残る歌合に限られることにも起因している。歌合断簡が、発見報告される例もあり、歌合資料の研究と整備が進められているものの、平安初期の歌合の解明はまだ研究の余地を残している。その中で、私ども研究グループは、『古今和歌集』の前史となる歌壇を率いた宇多天皇(以下、宇多院の呼称で統一する)が関わる歌合に着目して研究を続けている。「寛平御時菊合」「亭子院女郎花合」「宇多院女郎花合」「朱雀院女郎花合」「宇多院物名歌合」については、これまでに成果を報告することができたが、古今集的な和歌表現の確立過程を解明するにはさらなる研究が必要であった。

2. 研究の目的

1. に述べた研究成果に続き、宇多院が関わる歌合について、さらに資料的には完全でない小規模の歌合についても注釈・解説を進めることとした。その際には、平安初期の漢詩表現を取り入れた和歌表現が詠み出されるなかで、その表現が和歌史の中でどう継承されるのかを視野に入れつつ、一つ一つの歌合の開催意図を探っていくことを目的とした。

しかし、研究の半ばから、歌合という披講形式を考察する中で、「是貞親王家歌合」「寛平御時中宮歌合」は、『新撰万葉集』の「選集」に向けて企画されたものであることを無視して歌合の構成意図を考えることは難しく、その考察のために『新撰万葉集』への和歌提供がもっとも多い、「寛平御時后宮歌合」を対象に加えることにした。

3. 研究の方法

歌合の書写資料を可能な限り参観し、本文を策定する。その本文により、和歌を注解し、それが提出された歌合の場で、和歌が詠まれた目的や果たした役割を考察する。和歌については、底本翻刻・異同・整定本文・現代語訳・語釈・他出・補説の項を設けて解説し、補説において、本文異同の問題点や「番」の構成意図などを考察した。

また、歌合全体を通して、歌合の開催目的と、その時代にその目的の会が催行された理由を考察することで、この時代の活動が、勅撰和歌集の撰集へどのように繋がるかを研究する。

4. 研究成果

当初、対象と考えた小規模歌合{〔仁和三年八月二十六日以前春〕中将御息所歌合(2首) 副文献資料のみ、〔寛平五年九月以前秋〕是貞親王家歌合(71首)〔寛平八年六月以前〕后宮胤子歌合(32首) 延喜元年八月十五夜或所歌合(15首)など}のうち、「是貞親王家歌合」「延喜元年八月十五夜歌合」「寛平御時中宮歌合(后宮胤子歌合)」についての注解は完成した。「寛平御時后宮歌合」の注釈が半ばであるが、当歌合の和歌について、左歌は『新撰万葉集』の上巻に、右歌は下巻に収録されている指摘がある。その例外や底本によって左右がずれる例などをどのように考察するかという『新撰万葉集』成立に関わる課題を検討している。

以下、各歌合ごとに述べる。

(1)「是貞親王家歌合」

三木が「是貞親王家歌合について」と題して『百舌鳥国文』30号(2021年3月、P.73-87)にまとめた。

開催者について、宇多天皇の兄である「是貞」の名が歌合名に冠されている。新間一美氏(『新撰万葉集巻上(一)』新撰万葉集研究会編、和泉書院、2005年)が、「寛平御時后宮歌合」の主催者について「班子(宇多母)」説と「温子(宇多后)」説がある中、「温子」説を採られるように、和歌活動について多くが知られる「温子」が宇多院のそれを支えたと考えることが自然である。『新撰万葉集』に向けて企画された歌合群を包括して考察するとき、「温子」は主催者側の一人と考えられ、是貞親王もそれに含まれるのだろう。歌合名「是貞親王家」は「開催場所」を冠する例に倣った可能性が大きい。

これらは、対象歌合を総合的に考察して導かれるものであった。

(2)「延喜元年八月十五夜歌合」

池田和臣氏『古筆資料の発掘と研究』(青簡舎、2014年)に報告された新資料を加え、論文を参考しつつ注釈した。『平安朝歌合大成』は記録に見える「延喜元年八月二十五日 或所前裁合」と同時かという説を載せるが、歌枕を詠み込んだり、折句で沓や冠に「あきのつき」「のきのつき」を詠んだりする歌合の元の規模も判明せず、前裁合であるとも決定できないが、検討を続ける。

(3)「寛平御時中宮歌合(后宮胤子歌合)」

『平安朝歌合大成』においても、成立年次不詳としながらも、二十巻本目録の「胤子」記載

を元に「后宮胤子歌合」と呼称されたもので、全十七番のつがいが、春・夏・冬各三番、秋・恋各四番で構成され、形式的には後の内裏歌合に典型的な四季・恋題で構成されている。これは「寛平御時后宮歌合」が春・夏・秋・冬・恋題（各十番の計百番）であることと共通しているが、この2歌合の前後関係も現在は確定的ではない。併せての開催意図や主催者の検討が必要である。

本研究では、「歌合」としての選歌がなされたなら「番」を構成させる左右の歌の対比や類似などがあるのではかという観点も加えて検討した。本歌合が「歌合」という形式として撰歌されるのであればという前提である。「撰歌合」という用語が、開催される歌合のために場に提供する和歌を選ぶという一般的な意味に加え、「撰集」のための撰歌の形式であるという萩谷説がどこまで実証できるのかという、本歌合の開催目的解明に繋げる意図であった。

(4) 寛平御時后宮歌合

「寛平御時后宮歌合」について、そもそも資料に残された「番」の「左右」のあり方の当否（その二首が当初の組み合わせであったのか、なぜ二首が組み合わせられたのか）から検討が必要であることが明らかになった。先行研究にも特に指摘はなく、当初は番の組み合わせに問題があるとは想定していなかったが、注釈を進める中で、資料的にも、「番」の妥当性としても、精査が必要であることが解った。また、萩谷朴『平安朝歌合大成』で示される補遺の和歌についてもさらに丁寧な考察が必要であるなど問題の所在が確認された。

(3)の「寛平中宮歌合」で考察した各番の構成意図は、題の季節を詠む素材ばかりでなく、対照的な歌の「心」や「景」について説明できるものもあったが、不明なものもあるため、全番をデータの的に解析し、本歌合考察の参考としたい。

萩谷朴氏が『平安朝歌合大成』で述べる、(1)(3)(4)の歌合に対する「撰歌機関」という認識が歌合和歌から実証できるか、本研究を継続するためにも「撰歌合」の定義を、研究史的・和歌史的に考察したものが、三木「平安初期歌合における撰歌合の意味 是貞親王家歌合・寛平御時后宮歌合を中心として」(『神戸教育短期大学研究紀要』5号、2024年3月、p.75-65)である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 奥野陽子	4. 巻 90-7
2. 論文標題 初期歌合における文字遊び 「をみなてし」を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三木麻子	4. 巻 30
2. 論文標題 是貞親王家歌合について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 百舌鳥国文	6. 最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24729/00017427	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三木麻子	4. 巻 5
2. 論文標題 平安初期歌合における撰歌合の意味 是貞親王家歌合・寛平御時后宮歌合を中心にして	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 神戸教育短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 76 - 65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24668/kyotanlib.5.0_76	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

神戸教育短期大学紀要（オンライン版） ISSN 2435-631X
<https://www.shukugawa-c.ac.jp/college/research/bulletin/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岸本 理恵 (KISHIMOTO Rie) (10583221)	関西大学・文学部・教授 (34416)	
研究分担者	恵阪 友紀子 (ESAKA Yukiko) (90709099)	京都精華大学・国際文化学部・准教授 (34317)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	奥野 陽子 (OKUNO Youko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関